

「新しい命に生きる」(ローマ六・一〜一四)

1 キリストの死にあずかる

今日の聖書箇所、いまお読みした第六章一〜一四節、ここには、〈洗礼〉(バプテスマ)という言葉が何回も出てきます。洗礼がこの箇所の大きなテーマであることは明らかです。

先週の日曜日、三人の方が洗礼をお受けになりました。本当に喜ばしい、心躍るときでした。天上の喜びでもありました(ルカ一五・一〇)。あのとき、あそこで何が起こったのでしょうか、それを考える、今日の箇所は、最適の箇所だと言ってよいように思います。洗礼について、聖書を中心に、できたら少し自由に話しができればいいと思います。

洗礼がこの箇所の大きなテーマだと申しました。そこではじめに問題にしてみましたのは、なぜここで洗礼が、これまでのローマ書の流れの中からテーマとして浮上してきたのかということ。ここに来て洗礼について語り始めることの意味を考えておきたいのです。

パウロが洗礼について、この手紙で言及するのは、じつはここが初めて、またここだけです。これまでのところを振り返って見ましょう。ここまでパウロがくり返し語ってきたのは、結局一つのことでした。人は〈信仰によって義とされる〉ということでした。神の前に人がよしとされるのは、ただ信仰によるのであって、行いによるのでも、割礼によるのでも、律法によるのでも、すなわち、律法を熱心に行うとか、守るとかによるのでもないのです。

また〈信仰によって義とされる〉というときの〈信仰〉も一つの〈行い〉というわけではありません。とすれば、人間には何もないということです。神にとつて評価されるべきものは何もない、いな、むしろ、マイナス価値しかないということです。すべての人間は、アダム的人間です。罪人です。その罪人が神によって義とされる、罪人のままで義と認められる。パウロはこの神を「不信心な者を義とされる方」(四・五)と呼んでいます。信仰によって義とされる、これがパウロの宣べ伝えた、そして教会が今もよって立つ福音です。

〈罪人〉が〈義人〉と見なされる。〈罪人〉が同時に〈義人〉である。もしこのことをそのまま受けとれば、これほどの〈逆説〉はないのです。そうです。神の恵みの逆説です。キリスト教はこの逆説に立っています。そのとき、こんなふうな質問が出てもおかしくないのです。

では、どういうことになるのか。恵みが増すようにと、罪の中にとどまるべきだろうか(一節)。

こうした問いは、罪の中にある私どもが義とされるといっているのであれば、ありうるも

のでしよう。しかしこの想定される問いに対しパウロが与えた答えも、私ども、急いで聞いておかなければなりません。こうです。

決してそうではない。罪に対して死んだわたしたちが、どうして、なおも罪の中に生きることができようか。それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを（二〜三節）。

罪の中にとどまるべきだろうか、という問いに対してパウロの与えた答えは、最大の否定です。「決してそうではない」（口語訳「断じてそうではない」）。絶対にそういうことはない。あつてはならないだけではない。そうすることはできない、不可能だと言っているのです。

その理由が、まさに洗礼にあるのです。洗礼とは、キリストにあずかること、キリストの死が自分のものとされることです。

この箇所の「キリスト・イエスに結ばれるため」というのは、元の言葉を尊重して訳せば、キリスト「の中に」です。洗礼は、私どもをキリストの中に入り込ませる出来事です。

キリストは死んで、すなわち、罪の咎（とが）をすべて引き受けて死んで、罪との関係を断ち切った。私どもも罪との関係を断ち切って、罪の自分に、「古い自分」（六節）に死んだのです。それは、そう思う、そう思いたい、という主観的なことではありません。客観的な事実、現実です。それゆえ、どんな理由であっても、なお罪の中にとどまり、罪と関わることは、私どもはやできなくされた、ということ。それが洗礼の意味です。

2 キリストの甦りにあずかる

洗礼はしかし、イエス・キリストにあずかることとして、その死を自分のものとするだけでありません。イエス・キリストの甦りの命を自分のものとしていたただくことでもあります。

わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです（四節）。

洗礼とは「古い自分に」死ぬ（六節）ことだけではありません。「新しい命に生きる」ことでもあります。

先ほど、信仰によって、ただ信仰によって義とされること、不信心な者が義とされること、それこそが福音だと申し上げました。それはその通りです。しかし福音には

もう一つの面があります。それは、義とされて〈生きる〉という側面です。義人は信仰によって「生きる」(一・一七。ハバクク二・四)のです。洗礼は、そのようにして信仰によって生きる、福音によって生きることの始まり、出発点でもあります。洗礼が、その新しい生活の始まりです。始まりであって、ゴールではありません。ゴールは神の国であり、私どもに約束された永遠の命です。それを目指して、私どもはいま歩み始めるのです。

ここで、私が、いわば座右の銘にしている言葉を一つご紹介します。それは「生涯求道者」です。これは岡田美須子(1907-94)さんという女性教職から学んだ言葉です。洗礼は出発であって、決してゴールではないことを、少し別の角度から申し上げたいと思います。

岡田先生は、戦後、自ら松山城東教会を起こし、晩年まで、そこで牧師をなさった先生でした。私が最初の任地(大洲教会)にいたときお目にかかり、時々、高倉徳太郎(1885-1934)牧師のことなどお聞きしたりしました。寡黙な方でした。「生涯求道者」と題した七六歳のときの短文に、こんなことを書いておられます。

私は未だ求道者であることをやめていません。神の真理を問いつづけています。私は老年になる迄生きのびて、神と神の真理をきわめたいと前々から思うようになっていました。それは、たゆまない信仰生活において示される神と神の真理は、各年代の生活に応じて示されてゆくのであるから、最後の年代に示されるものを見ないでゆくことは残念だと思ふからです」(『ただ御言葉を』一九九〇年刊)。

これを読んで私は深く感銘を受けました。信徒も、むろん牧師も、生涯求道者として神の真理を求め、追いつづける者でなければなりません。いつも、いつまでも、聖書を学び、信仰の訓練を受けていくのです。私どももこの姿勢を崩さず、謙遜に、信仰の道を歩みつづけたいものです。

〈生涯求道者〉というのと同じ意味のことを、このローマ書の著者パウロもフィリピの信徒への手紙で書いていたことを思い起こします。フィリピの信徒への手紙第三章です。

わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです(三・一二)。

ここに生涯求道者としてのパウロの姿があります。そしてその推進力は、いうまでもなく、彼がキリストによって捕らえている、ということであるに違いありません。

3 洗礼に信頼せよ!

こうしたキリスト者の生活は、しかしいつも順調というわけではありません。私ども心も体もまことに弱い存在です。ささいなことに躓きをおぼえ、神への信仰も揺らぎがちになります。

こうした中で、自分が洗礼を受けているという事実には信頼せよと語り、勧めているのは、宗教改革者ルター（1483-1546）です。

だから大胆に、自由に、洗礼に信頼し、すべての罪や良心の恐れにさからって洗礼を守り、〈私はきよいわざを一つもしていないことを知っている。しかし私は洗礼を受けている。そのことによって、いつわりたもうことのない神は私に対して、私の罪を私に帰さず、罪を殺し、絶滅することとしたもうているのである〉と謙遜に言わねばならない（ルター、洗礼についての説教から、一五一九年）。

義とされて生きる、しかし生涯にわたる信仰の生活には、いろんなことがきつと起ります。

ルターは「洗礼に信頼せよ」と言っています。そして「しかし私は洗礼を受けている」と自らに謙遜に言っています。

試練と言わざるをえないことも、起こるでしょう。なるほど人生の試練は、私どもを鍛錬しようと神が与えるものであるかも知れません（ヘブライ二二章）。しかしそれを認識すること、そして忍耐することは容易なことではありません。ルターはその時こそ、洗礼に信頼せよというのです。私どもの信仰が神から試されるとき、まさに自分は洗礼を受けているというこの事実が、あなたを、どんな罪からも、どんな不安からも守るのです。洗礼を受けているというその一事が、神に敵するどのような力からもあなたを守るのです。

さて洗礼は、キリスト者の個人としての新しい生活の始まりであるだけでなく、教会に加わることであることも、私どもしつかり理解しておきたいと思えます。古いカトリックの教会などに行くと、洗礼槽が、教会の入り口に置かれているのを見かけます。それは、洗礼が、教会に加わる儀礼であることを表しています。

洗礼に自己洗礼ということはありません。洗礼は〈受ける〉のであり、〈授け〉られるのです。そのようにして、神の民の一人となり、神の民に連なります。信仰の友が私どもを、私どもの信仰の弱さを支えます。「自分の心の中のキリストは、兄弟の言葉のなかのキリストよりも弱い」（ボンヘッファー、共に生きる生活、より）。教会の信仰の交わりによって私ども支えられます。そして共に、一緒になって、御国を目指すのです。

義とされて〈生きる〉というテーマが、今日の箇所から始まりました。新しい生活は洗礼から始まります。新しい命を生きる、この意味を、更に、来週、学ぶことにいたします。

（二月一九日）